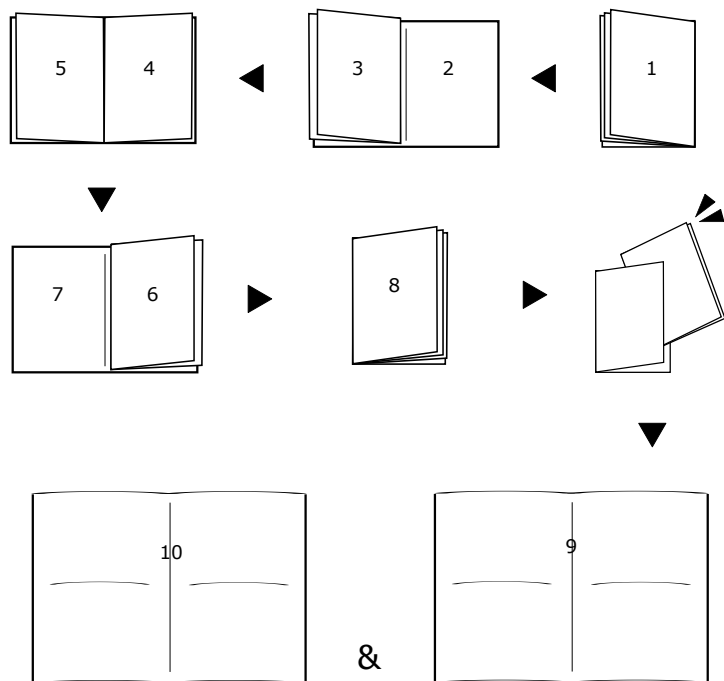


# 詩誌 極微

vol. 5

佐野 豊  
小田原 慎治  
篠田 翔平  
森田 直

TAKE  
FREE



## 編集後記

極微vol. 5をお届けする。なんとなく二週目の創刊号という気がしている。三ヶ月に一度の発行ペースをやめ、各々が新しい門出を迎えている。発行ペースはおちるかもしれないが、もっと大事なものに少しずつ気付きはじめたようである。二週目の創刊号をこころをこめて。この四つ織りが、たくさん開かれますように。（佐野）

## 詩誌 極微 vol. 5

発行人——佐野 豊  
発行所——佐野書房  
発行日——2020年4月5日

## ご意見・ご感想

ご意見やご感想をお待ちしております。四人にとっての励みになります。以下のメールアドレスか、右のQRコードから送れます。

[shishi.kyokubi@gmail.com](mailto:shishi.kyokubi@gmail.com)



## バックナンバー

ホームページにバックナンバーをPDFで公開しています。

<https://shishi-kyokubi.jimdofree.com/>



冬のシンク 森田直

何ヶ月も前から  
食器類がよそよそしくて  
思ったように  
してくれない

コップは手からすっぽ抜け  
茶碗は米を吐き出すし  
箸は口に入るのを拒む  
仕方がないから毎日  
外食で済ます

食器は冷たいシンクの底で  
重なって縮こまり  
こちらを見上げるばかりで  
これでは何も  
してやれない

冬のシンクに積み重なった  
茶碗、どんぶり、汁椀、小鉢、箸など  
もう

戻してやることにした  
食器棚に  
汚れたままで  
もう  
使わないから  
それでいいと思った

狭くてつまらない食器棚に  
故郷のように  
家族のように  
並べてやった

果てしなき議論のあと 小田原 慎治

納得がいかない

どうしてもそれは、あるいは、  
などとやり取りをして出る

口語

文語は

宝物のようだ

時の命を持つ仕事だから

この議論には価値がある

時間間隔を失いながらしゃべり続けることはできる

十人の中に十一人いるような息の継ぎ方がある

それを見つめる目の思い出も

働くことは大変なことだ

重いものを運ぶこともある

意に沿わない絵を描くこともある

納得がいかない、それはと言って

にっこり笑われることも

だから宝物のようだ

意味につまづき

力が足りずに

君がうつむきながら夢を見ているから

わずかなお茶も水も出ない(出さない)

俗悪とたたかい疲れた顔をしている

自信を無くしたような

良い顔をしている

電話 佐野 豊

ボートが揺れて  
こわくて乗れなかった  
あのまま乗っていけば  
たぶん落ちていた

はじめて親友と呼べたきみと  
遊んだふゆの日

もう

とつくにきみはいないし  
まして僕だって  
ほとんどきみを忘れて  
毎日を過ごしているというのに

十二月

一年がおわる頃になると  
きみとの電話がはじまってしまう

最近はね

不思議な人と知り会ったよ  
おかしなことだけど  
そのひとがきみのような気がして

拒んだ電話は

もうとりにいけない

相変わらず

職場で

あたふた電話対応して

束の間の昼休み

一本電話したくなる

なぜか

まだ間に合うような気がしている  
ぼくが今度はコールする

出会い 篠田翔平

それから二人は、アパートのそれぞれの部屋へ帰っていく。

「あと十年は海なんて行かないだろうな。」十年後を知らないあの日の二人が似合わない日焼けをした腕で、手を振っている。

「また、みんなで行きましょうよ。」二十八歳の私は

三十歳のあなたを知らない。二〇三号室に灯が、

それから三〇三号室に灯がともる。夕暮れに飛び立つ一羽の鳥が、私の窓から

あなたの窓へやさしく移る。みじかい髪についた潮が

シャワーに洗い流されていく。

『いま、歌ってたでしょ。』その夜、閉まりきらない蛇口から零れる水滴のように

あなたからのメールが届く。あなたの耳が

布団ごしに、私の天井にふれている。『——やめないで。』

髪に隠れる横顔で、ケータイを握り締めて

『つづけて。』(あの日

私は、どんな歌をうたっていたのだろう) 二つの窓からは、

少しだけ角度のちがう月が見えた。帰り道

遠い町で、あなたはそんなことを思い出す。それから

自分の部屋の、一つ下の窓を見上げる。「こういう感情は、

何ていうんだっけ。」スーパールのビニール袋を握りなおして

狭いアパートの階段をのぼる。

「きみにしか、できない話があるって思うんだよね。」懐かしい六畳間では

あなたが、缶ビール片手に管を巻いている。

「秘密の話じゃなくて、きみならわかってくれるんじゃないかって、

そんな話が。」(さっきから、

同じことばかり。) 困った笑顔のまま

「ぜんぜん関係ない話してもいいですか？」あのころの、あなたの口癖で

私が語りだす。「友達が死んだんです。」——十年後の春のこと。

棺の中には、使い古された仏和辞典と

小さな〈顔相占い〉の本が入られた。不思議だった、あんなに長い時間をいっしょに過ごして

彼女の信じていたことも知らなかった。「…ぼくの顔は、

どんなふうに見えていたんですか？」

(——いえるわけじゃないじゃない、そんなの。) あなたは、やわらかそうな笑顔で、頬杖をつく。夕方、

橋の上で、新盆の迎え火をする。

「一度だけ、ふたりで花火したよね。」夕闇の土手には、

手持ち花火のひかりに照らされたあなたがいる。欄干の私を

ひかりの中からふり仰ぐ。——小学校のころね、

怪我をした二羽の小鳥を拾ってきて、クラスのみんなで世話をしたの。大切に育てて

夏休み前の最後の日、三階の教室の窓から放った。

鳥たちは、少しの時間いっしょの風の中において、それから、はなればなれになる。

「もう、二度と出会わないんだって、そのとき、はつきり思った。」

きみにしか、わからないと思った。

…きみなら、わかると思った。「きつと

そうやってひとと別れてきたんですよね、先輩は。」澄みわたった夜の空へ

花火を掲げた。風に、ワンピースが膨らむ。白いひじがふれて、

あなたの震えるひかりがかさなる。

(また、かならず会えます。) ひしめきあう星たちの中で、

二つの火が、いくつもの季節を越えていく。

「先輩、踊ってますよね、たまに。」裸足の二人が、夜の川で小さな水しぶきをつくる。

「…こまった住人だよね。」おかしなステップで

星空が揺れる。

(ずっと、見上げていた。)

——二年後、あなたの部屋は、空っぽになる。

あなたの卒業制作の小説は、教授にぼろくそに言われたという。——発電所を改装したふるいアパートは、

使い古した星でいっぱい、ふたりのくるぶしには

いつまでも星の匂いが残った。

「うお座同士ってね、

ものすごく気が合うか、完全に無関心かの、どっちかなんだって。」

海からの帰りの電車、そんな話をするうちに

あなたは眠ってしまう。

私は、あなたのとおりで、流れていく風景をずっと見つめている。

次の日は雲ひとつない青空だった。そっと（この雨が過ぎたらうちに遊びにきて。）声だけが、まだ風のなかで

濡れた傘をかたむけている。滴はいっせいに落ちて、わたしの肩を濡らし「ごめん。」うつむいたまま、てのひらには小鳥が包まれている。「ごめんね、わたしのせいで」それは、クラスで飼っていたインコだった。もう

何十年も前に死んでいるのに、内藤さんはずっと

こんなものとともに生きていたのだ。（埋めに、行こうよ）雨で濁った川を遡り水源だった場所へと歩む。いちめんの銀色の穂の海のなかを

手を取り、雪のうえみみたいによるめきながら、「あのバスに乗らなきゃ間に合わないよ」消え入りそうな小道を

（もうちょっとでトイレだから、）必死にたどるのだけれど

内藤さんの家は広くて、わたしは、わたしが今どこにいるのかも分からない。（方向音痴だね、いつまでたっても。）髪を束ねた内藤さんがしずかにバスから降りてきて、わたしの前を照らす。

「動物って、死んだら石油になるんだって」真っ黒な小鳥は、彼女のてのひらの中で

小さな火になって燃えている。「熱くないの？」のぞきこむ、「ほら、

親指と人さし指で、ここの紐を取ってごらん」わたしたちの火は、タワーになって

冷えながらゆっくりと伸びていく。夕陽に照らされて真っ赤な紐は

からまりながら、指のすきまに階段をいくつもかさねていく。「かいだんの横が、

お風呂場。」とうめいな水はあふれつづけ、幾層にもなつて耳の奥に溜まっている。

（きょうは泊っていきなよ。電車もぜんぶ止まってるって

お母さんが言ってた。）窓の外には

銀色の波がどこまでもつづいていた。月に照らされて、

赤い紐の影がとおい街までも伸びていく。「いぎよい、って読むんだよ」わたしたちは

まだ見ぬ「いぎよい」を高く掲げる。タワーのてっぺんに立って、

傘にのこる無数の滴たちをいっせいに放つ。風にのって、

校庭は雨上がりのくもの巣のように煌めいている。「わたしね、

あしたから内藤じゃなくなるんだ。」せまい晴れ間におさまりながら

わたしたちはめいめいに、台風のまんなかを見つめていた。（これが過ぎたら——）町を

銀色の風が吹き抜けて、無人のバスはまっすぐに

雨の方角へ消えていく。

## プロフィール

佐野 豊 (さの・ゆたか)

1984年生。  
休みの日は本を読みたいと思っている。  
読み進められるページはなぜかいつも数ページ。  
夜とはいえ、まだ9時なのに寝てしまう。ポータブルCDプレイヤーでニコロハスを。古本屋巡り。A型。未来はみないで。

小田原慎治 (おだわら・しんじ)

1983年生。車のガソリンメーターには、給油口の位置を示す印がついていることを、最近教えられました。注意して見ると実際の車もそうっており、とても驚きました。こういうことはまだまだありそうです。

篠田翔平 (しのだ・しょうへい)

1989年生。詩集鋭意製作中。

森田 直 (もりた・なお)

1989年生。横浜市出身、東京都在住。会社員。新型コロナウイルスによって、楽しみが尽く消えていきます。「こういうときにこそ創作は捗る！」という機会は今までにもあり、そして逸し続けてきているので、自分にあまり期待していません。